

敷屋ネムンギン

又吉栄喜



敷屋ネムンギン

mitayoshi edit

又吉栄喜

集英社

ギンネム屋敷

一九八一年一月一日 第一刷発行
一九八二年二月二八日 第二刷発行

著 者 又吉栄喜

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

101 東京都千代田区一ツ橋二〇五〇一〇

電話 (〇三)二三〇一六三六一 (出版部)
(〇三)二三八一二七八一 (販売部)

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 七八〇円

検印廃止。落丁、乱丁本は取り替えます。

© E. Matayoshi Printed in Japan 1981
0093-77293-3041

ギンネム屋敷

ジョージが射殺した猪

目次

ジョージが射殺した猪

5

窓に黒い虫が

43

ギンネム屋敷

139

装画 田淵安一
装丁 菊地信義

二日後がペイデー（給料日）だ。ジョンたちは少額の金しかもっていない。ジョンたちはすぐドルを使い果たし、そのうち、ジョージも貸すドルがなくなった。ホステスたちはいつものように腰をすえて相手にしなくなった。入口のドアにひんぱんに目をやるのをジョージは気づいていた。客がくるのを待っている。ジョージは出なかった。しかし、言いだせない。ばか騒ぎしていたジョンたちも次第にぎこちなさを感じだしたようだ。ウイスキーはどうに一本空^{から}になっていく。ホステスたちはキャッシュ（現金）キャッシュといい、代わりを出さず、乳房や太股^{ふともも}も触れさせない。ジョンもワイルドもワシントンもくすぶっているようにみえる。三人とも赤ら顔で太ちよだ。どの顔もますます赤らみ、どの巨体も小さきみにいらだっている。何かのきっかけですぐさま叫び、暴れだす、そのような気配を感じる。ジョージはまだ、おちついていて。しかし、仲間の異様なふんいきで小さい動悸がする。中途半端が一番いけないとジョージは思った。

飲まぬなら一滴も飲まず、ホステスとも話をせず、飲むなら酔いつぶれるまで飲み、ホステスとペッティングやセックスまでする、そのようであればならない。

二人のホステスが何気なく静かに立ちあがり、ドアに向かった。赤黒い日焼け顔の白人が入ってきた。彼らは三人とも大きい目玉をギョロギョロさせている。ベトナム傭兵だ。ジョージはすぐわかった。このような傭兵は金づかいが荒い。Aサイン（米兵立入許可）バーのホステスは彼らを「山男」と呼んで、至れり尽くせりのサービスをする。最高の金づるなのだ。ジョージたちは彼らに一目おいている。ジョージたちは米本国からきたての、まだ沖繩勤務の兵隊で、百戦錬磨の彼らは実戦の先輩なのだ。彼らはしかし、寝てもさめても戦争が忘れられないんだとジョージは思う。いくら飲み、いくら騒ぎ、いくら遊び、いくらセックスしても戦争気分からぬけられないんだ。彼らは常にピストルやジャックナイフをポケットにしのばせ、基地内ではともかく、いったん基地外に出ると数限りない暴行を犯すんだ。ジョージは反面、彼らを軽蔑していた。

とうとう、一人残っていたホステスが立ちあがった。すぐ、ジョンが毛深い太い手がつしと女の左腕を握って、わめいた。俺たちをおいていくのか！ 俺たちの相手は誰がするんだ！ 劣等民族のくせにばかにする気か！ 右手でジョンの頭を押したり、腕をふりはらおうとする女をジョンは強引に引っ張り、ひざの上に倒した。両側からワイルドとワシントンが女の手、足を押さえた。ワイルドがヒステリックに叫び、足をけりあげている女の薄い黒い下着をおろし、高笑

いしながらジョージの顔に投げた。ワイルドは足を女の股にこじ入れ、たくみに女の足をひろげ、マッチをつけ、女の両足のつけ根を照らし、大笑いする。ジョンもワシントンも首を曲げ、体をよじり必死にのぞきこみながら笑う。ジョージは顔をこわばらせたまま、みつめる。女は全身をばたばたさせ、わけのわからぬ言葉でわめく。ジョンがハンカチで女の口をふさいだ。ワイルドは女のヘアを焼く。ヘアはジジとちぢれ、ちぢみ、すぐ火は消える。ジョージはふと、〈山男〉たちをみた。〈山男〉たちは薄笑いしていた。ホステスたちがしきりに、ジョンたちを止めるよう、〈山男〉たちをうながしているようだ。〈山男〉たちはじっとみたままだ。女は肌に密着した厚めの白いドレスを着ていた。ジョンたちはしきりに脱がそうとするが、ままならない。ワシントンがジャックナイフをとりだした。少しあいている女の胸もとに入れ、腹部にかけて切り裂いた。女は暴れた。死にもの狂いにみえた。ジャックナイフは女の皮膚に触れ、血がドレスににじみ出た。女はハンカチの中で歯ざしりしているとジョージは感じた。目がみひらいている。ジョージは立ちあがり、シートのすみに寄った。ワシントンはジャックナイフで女の首や顔面をなでまわしたりする。顔は笑っているが、あれは冗談じゃない。ジョージは動悸がおさまらない。酒の酔いとはちがう。ふいに目をくり抜き、鼻をそぎ落とし、頸動脈をかき切るかもしれない。すべてのホステスがジョンたちを囲んで何かわめいている。嘆願しているようでもある。怒っているようでもある。悲しんでいるようでもある。ジョージはよく知らない。一人のホステスが後ろからジョンのあごに両手をかけ、思いきりひっぱった。ジョンはあごをあげ、苦しがつた

が、目の上の女の顔をギョロリとみ、右こぶしを握り、女のあごに突きあげた。ガクツと変な大きい音がした。女は無言のままフロアに崩れた。女たちはいちだんと騒ぎ、しゃがみ込み、又、騒ぎながら、数人で女をカウンターの上に運び寝かせ、氷をつつんだタオルであごを冷やした。そして又、ジョンたちを囲み、カウンターの女をゆびさし、一人残らずわめく。〈山男〉たちも立ちあがっている。両手を腰にあて、組み、ポケットに入れ、仲間どうし何か言いあい、笑いながら見ている。ワシントンのジャックナイフは今、女の小さい扁平の乳房をはっている。黒く大きい乳首が、ゆっくり回転している青い光の中でもめだつ。子供を五、六人も産んだ四十近い女だとジョージは思った。厚化粧の下顔も血色がなく、皮膚がたるみ、かさかさになっているはずだ。米国軍人がそんな女をもて遊んでいる。ジョージは胸がむかついた。早く強姦してしまえ。すめば、俺がピストルで射ち殺してやる。二人の女がジャックナイフをうばいとうろうとワシントンと、もつれあい、二人とも腕を切られ出血した。一人の女は出血がひどく、おしぼりを二枚押しあてて、カウンター内にうずくまった。ワシントンはよほどしゃくにさわたとみえる。ワシントンはこの二人の女を目で追ひ、女の肩をはなし、立ちあがった。女は身をかがいて、身をおこした。ワイルドの足につまづき、しかも、ジョンの手を強くふりはらった反動で女はころんだ。ころんだまま女はフロアを四つんばいにはって逃げた。ワシントンが女に馬乗りになり、何か叫びながら、背中や尻の服地を切り裂いた。又、白地に血がにじみでた。女は口をふさがれているハンカチをはずせなかった。女が泣き叫んでいるのはわかる。つけまつげがゆがみ、アイ

シャドウがはげ、おしろいがおち、厚くぬった唇がゆがみ、醜い女だとジョージは思った。女はようやくワシントンを振りはらい、トイレをあけ、中に入った。ワシントンはジャックナイフの柄をドアにはさみ、ドアがしまり鍵がかかるのを防ぎ、両手でドアのノブをひっぱった。ジャックナイフがフロアに落ちた。すごい勢いでドアはあいた。ワシントンは尻もちをついた。小太りしたホステスが拾いあげたジャックナイフをワシントンにかまえた。ワシントンはすぐおきあがり、トイレのドアに群れている女たちを大声で威嚇し、女たちがひるんだすきにトイレに入り、ドアをしめた。鍵をかける音がした。と思うと、すぐ、ドアをたたく音、悲鳴、ののしっているらしい声、うめき声、けたたましい笑い声、どなり声、それらがごっちゃに混じり響く。女はハシカチをはずされたらしい。ホステスたちはかわりばんこにノブをまわし、引き、ドアをたたき、女どうし何か言いあい、中の様子を懸念している。

ジョンとワイルドはだいぶ冷静になっていた。それでも、ふいに高笑いしたり、どなったりする。ジョージはいらだった。酒を女の顔にぶっかけたい、グラスやビンをウイスキー棚やフロアにたたき割りたい。何かしなければジョンたちに無力者よばわりされる。しかし、きっかけがつかめない。あまりに突飛だ。なぜ俺はみんながやる時、すぐやれないのだ。考えすぎるのか。あの騒いでいる女たちも決して俺をほめたたえるはずはない。いくじなしとののしるだけだ。一カ月前にやはりジョンたちが暴れた。俺はやはり何もしなかった。数日後、女たちはその夜の事件を忘れ、ジョンたちにこび、ついていったんだ。俺はよく憶えていたのに。ばかな女たちなん

だ。どうしようもないんだ。あのトイレのワシントンでさえ決して玄関払いはくわない。明日の夜になれば、女たちは平気でワシントンに酒をつぎ、乳房をさわらせる。ワシントンの自慢の口の髭を皮ごとジャックナイフではぎとりたい。ホステスたちを一人残らず射殺したい。胸くそが悪い。ピストルをもっていない。残念だ。もちあるくべきだ。酒ビンに、ライトに、ネオンに、ジュークボックスに撃ち込む、割れる音はいかにさわやかか。大口をあけて、いやらしく笑うあらゆる種類の人間の喉に撃ち込む、どんなもんだらう。

ドアが開き、マスターが飛び込んできた。黒く脂ぎった丸顔、小太りの短身が黄色いワイシャツと黒の蝶ネクタイに妙に似合う。その中年男はすぐジョンに近づき、何か言いたした。事情はすでに知っているらしい。ジョージはジョンの背後に寄った。マスターはかなり英語がたつしやだった。しかし、声が小さい。ききとりにくい。マスターは無理に冷静をよそおっているようだ。ジョージはあらましはつかめた。金で片をつけようとしているらしい。ジョンが立ちあがって叫んだ。お前の店のAサインを取り消させてやる、いいな、かまわないんだな。米当局の心証を害し、米兵立入許可証（Aサイン）を取り消され、泣くに泣けない業者はこれまで数限りなくいた。ジョンのおどし文句がどんなに強力か、ジョージも知っている。マスターはふいにつくり笑いをしながら、ジョンたちをなだめ、談合を申し込んだようだ。マスターはジョンたちの腹をさぐり、かけひきしながら、徐々に金額を下げてくる。ジョンたちはまともにとりあわない。お前もジャックナイフでさされたいのかとおどすだけだ。マスターはかえって笑顔を大きくし、

ジョンたちの顔色をうかがいながら金額を言う。二十ドル、これが最後だ。これ以下では断じて合意できない。男はひらきなおる。婦女暴行代、傷害代、器物破損代、すべてで二十ドル。なんだ、これはとジョージは思う。これは俺たちの一晩の一人分の飲み代でもない。すぐ、金をたたくつけてやりたい。こんなはした金に執着する男のあさましさがいやだ。顔もみたくない。しかし、ジョンたちはマスターをにらみつけ、どなるだけだ。女が悪いんだ。金は一セントもはらわん。

トイレの周辺で女たちがざわめいた。ワシントンがズボンのバンドをしめながら出てきた。マスターはすぐワシントンに近寄り、談合をはじめた。両目がとろんとしたワシントンはまともにマスターをみず、めざわりだといわんばかりにマスターの顔をグローブのような手で押した。マスターはよろめき、シートにつまずき、フロアに尻もちをついた。ワシントンは夢遊病者のようにドアをあけ、外に出た。ジョンが捨てゼリフをはいた。なんであんなに騒ぐんだ、たかがいたずらぐらいで、敗残の劣等者のくせに。ジョージはトイレを見た。仲間の女たちに囲まれ、強姦されたらしい女はうずくまっていた。無言だった。死んだのかなとジョージは思った。《山男》たちがしきりに女をよんだ。何をしているんだ、早くすわれ。ジョージはあわててジョンたちを追ひ、外に出た。熱気がむっときた。マスターらしき者の大声がきこえた。ジョージはふり向かなかった。ののしられている気がする。沖繩方らしい。あの語気あの語調はたしかにののしている。マスターは逃げる準備をしながら、こぶしをふりあげ、歯ぎしりしているだろう。しか

し、ホステスたちはあの《山男》たちに群がっているにちがいない。ののしりの余韻はながくジョージの耳に残った。俺は何も悪さはしないのにとジョージは思った。

ジョージはジョンたちの二、三步後ろを歩いた。ジョンたちは沖繩人を殺したいと声を荒げている。本気か冗談かわからない。タクシーをやるか、スーパーをやるかとも言っている。強盗だとジョージはかんづいた。もつと狂暴なことをせねばはらの虫がおさまらないのか。いや、とりこし苦労だ。ジョンたちはただ、酒を飲む金が欲しいだけだ、女が欲しいだけだ。不意にガバツとスカートをまくるんだ。女たちは誰もパンティをはいてないぜ、《グリーン》よ、女たちはキヤーキヤー騒ぐんだ、喜んでるんだぜ。《オリエントタル》はパンティに手をつっこませるぜ、さすがに俺によ、俺の指が疲れちゃうまでな、お前にもか。だがよ、あそここのエミコはすぐ俺のひざにまたがってよ、首にまとわりつくんだ、どうしてもはなれないよ、俺はにがてだな。なに言ってるんだ、まんざらでもなさそうにニヤニヤしてるくせに。なに。たしかに騒がしいな、ビールかけあって、どんちゃん騒ぎしてな。おい、ジョージ、お前はどこがいい？ どこでもいいよ。ジョージは思わず言った。まだ帰るつもりはないのか。ジョージは酒が飲める気分になれない。脇の下が汗ばんでいた。悪い予感がした。ワシントンの様子はへいぜいと変わらない。しかし、ジャックナイフをふりかざしたあの情景はまだ、なまなましい。俺は女のあるそこにビールを飲ましたんだぜ、何回もよ、無理矢理ねじこんでな、あそこから飲んで酔うもんだな、ほんと